

# 木下木下

八月号

昭和二十一年三月二十七日  
明治三十五年三月二十七日  
昭和十九年三月二十七日  
昭和十八年三月二十七日  
昭和十七年三月二十七日  
昭和十六年三月二十七日  
昭和十五年三月二十七日  
昭和十四年三月二十七日  
昭和十三年三月二十七日  
昭和十二年三月二十七日  
昭和十一年三月二十七日  
昭和十年三月二十七日  
昭和九年三月二十七日  
昭和八年三月二十七日



## 俳句随想〔三三二〕

汀子

この場合、読者の頭の中では「古池」という言葉に関する連想が生き生きと動き出すのであるが、それは必ずしも過去に経験した古池の情景や心象ばかりではない。それぞれの読者の頭の中で「古池」という言葉と連想の網の目で連なつた全ての事柄が即時的に、つまり瞬間的に浮かび上るのである。

このようにして読者の連想を刺戟した上で、やおら「蛙とびこむ水の音」と下の句が提示されるのである。すると読者は先程の自分の連想と下の句との間で自分なりの折れ合いをつけなければならなくなる。つまり自分なりの解釈をしなければならなくなるのである。虚子が芭蕉のこの名句に対して晩年に解釈を変更したことは知る人ぞ知る事実である。晩年の虚子は静かな、淋しかった古池にも蛙のとびこむ音が聞こえるようになってきた。生き物の生動する春がやって来たのだと陽春の到来を詠った句と捉えたのであるが、そこには静かで淋しい古池という連想が充分に生かされている。

# 句日記

## 汀子

八月八日 綿業倶楽部

ついて行く心の添はず残暑かな  
八月十日 清交社

流星に夜空の舞台開け放つ  
流星のありし気配の闊仰ぐ  
露けしや仕上げし仕事なほ続く  
人の手の入らぬ空地の赤のまま

平成十八年八月六日 関西野分会  
水引の目立たぬ花の目立ちけり  
焼失のわが家もこの日原爆忌  
水引の花へいざなふ道細し

八月六日 下萌句会

ふと声のつづきを待ちぬ法師蟬  
入れかはり午後の客待つ晩夏かな  
稲妻に山荘の門閉ざさるる  
稲妻に雲の仔細の動きけり

欠席の多き晩夏の会となる  
八月七日 ロイヤル俳壇

秋といふことばの一人歩きして  
蛸を聞きつつ決めてゆけること  
山荘の秋を訪はんと思ふ日よ  
お隣の百日紅の咲くわが家

八月八日 大阪倶楽部

朝の間の秋めく風に誘はれて  
初嵐押して来られし休館日  
秋草の活けて背高きもの多く

皆残暑怖れて庭へ出て行かず

西瓜食へのどの乾きのをさまりし  
秋の客もてなすための模様替

人数の増減自由西瓜切る  
夏風邪を引きし理由を知つてをり  
花火見ることを仕事といふ勿れ  
八月十八日 時雨会

銀河濃しすなはち闇の深ければ  
日本はみづほの国よ稲の花  
農耕の民と生れし稲の花  
八月十九日 野分会

束ねたる水引草の余白かな  
羅を着こなしてゐて美しく  
新涼の和服きりりと着こなして  
八月二十六日 北信越ホトギス俳句大会前日句会

日本海には秋風のあり余る  
海見えてやがて着く町旅の秋  
旅宿に俯瞰の秋の日本海  
立山の見えぬ露けき旅路かな

波寄せて寄せて日本海の秋  
八月二十七日 北信越ホトギス俳句大会

刻々と残暑を配る日の出かな  
新涼の風とベンチのあれば足る

鱗雲朝空はるかまでつづく  
八月十六日 夏潮句会

# 廣太郎句帳

## 廣太郎

平成十八年八月三日 一水会

向日葵の三百本に日出づる  
アームストロング船長月涼し  
ビール酌むまでに選句は済まさねば

八月三日 蕪心会

秋近し阪神どないなつとんねん  
大川に晩夏の歪みありにけり  
それ以上近づかんといてよ暑い  
祭好き下町好きでカレー好き

涼し気な距離を保ちて猫現るる  
Aランチアイスコーヒー付けますか  
行水や子は喜々として服のまま  
病葉を看取のごとく拾ふ人  
底紅の白に甦りたる彼

八月十日 土筆会

蛸の祈りに似たる神の山

ねぶた見る東北弁に囲まれて  
新涼の里山越えて来りけり  
蛸に森従つてをりにけり  
木蔭より新涼生れくる早さ  
鯉口を開けて新涼吐き出せり

八月十五日 草木瓜会

青空が呼んでも赤のまんまかな  
赤のまま子等の目線といふ丈に  
日の本は永遠に八月十五日  
赤まんまパパ役は君ママは僕

八月十七日 登嵩会

海に山に都心に里に八月よ  
酔芙蓉風に千鳥足となりぬ  
都心閑散盆の月皓々と

父の背に隠れて花火見てをりぬ  
カンナ燃ゆあの日あの時偲ぶかに  
八月や今年も甲子園熱し  
八月の街紫に暮れ残る  
大花火地球の自転止めるかに  
八月や今日も移転の荷の増えて  
幾万の瞳に幾万の花火  
秋潮の彩となりゆくく日本海  
駅降りて都心の残暑放ちけり  
新涼をガイドの声に見つけもし  
阪神と残暑何とかならへんか  
総門に山門に新涼の風  
鉛てふ露けき屋根でありにけり  
山門に佇てば秋めく風少し

八月二十八日 朝日カルチャー 若草句会

新涼や朝の厨の蛇口より  
大文字生活の端に置く雅  
秋の蟬あの日はみんな若かつた  
移転の荷新涼を閉ぢ込めてをり  
新涼の存問となる二階かな  
大文字京を離れし人のこと

漁火を繋ぎ星月夜となりぬ  
新涼といふあなたとの距離であり  
新涼やもう阪神は白旗か  
新涼や高層ビルの奈落より

八月三十一日 夢三冠前夜句会

秋天に見下ろされたる一會かな

八月二十三日 目黒学園句会

# 雑詠

## 廣太郎 選

忽然と虚子忌未明に逝かれけり 長岡 安原 葉  
 落花ただ美しと見るかなしさよ 同  
 耕すや震禍の畑を繕うて 同  
 春風の庭とは試歩の小手しらべ 上越 堀前小木菟  
 長びくは承知の病冴返る 同  
 雪国の面目たちし春の雪 同  
 賑やかに時に静かにひひなの間 同 堀前恵子  
 表情の舞へや唄へや囃雛 同  
 享保雛にも光陰のとどまらず 同  
 草もちの肌理の荒さも田舎振 榎原 稲岡 長  
 截金の蕊かと思ふ肥後椿 同  
 愚にもつかぬ冗談ばかり万愚節 同  
 初桜雲低ければ濃かりけり 神戸 山田弘子  
 かげろふの庭より庭へ扉一枚 同  
 蛇穴を出て相棒がまだ居ない 同  
 十五分ほどの訪問にも春焔 東京 大久保白村  
 里人も称へる彼岸入の富士 同  
 囀や世界遺産に富士山を 同

董摘む声ちらばつてゆきにけり 大阪 塙告 冬  
 石鹼玉空に触れては空となる 同  
 山若葉静寂を染めてをりにけり 同  
 清貧に徹し春眠ほしいまゝ 仙台 小島左京  
 遅参せし言訳春眠とは言へず 同  
 母の日や知らざる母を画く園児 同  
 観音の池に迷走蝮の道 河内長野 吉年虹二  
 確かめに登り確かに初桜 同  
 揚雲雀五十四階より高し 同  
 海光を集め菜の花畑となる 熱海 嶋田一步  
 菜の花や海に舟あり船のゆく 同  
 黄水仙山の斜面が好きで咲き 同  
 うつむいて来るは摘草人なりし 同 嶋田摩耶子  
 手鏡に吾の顔元気野に遊ぶ 同  
 園案内図にもあるこれ花菜畑 同  
 万葉のころも少し野に遊ぶ 神戸 木村淳一郎  
 春の月照らし過ぎないやうに照る 同  
 流れてふ桜の散りたがるところ 同  
 天が呼び地が呼びさくら散り止まず 大阪 薦 三郎  
 花散つて来る花散つて来るのです 同  
 場面A 場面Bにも花吹雪 同  
 四月馬鹿だましおほせてふと悲し 神戸 長山あや  
 初花や雲に溶けさう眠りさう 同  
 かげろうて揺るる吉野の石仏 同

## 雑詠句評（七月号より）

静龍・とほ歩・憲明  
むつみ・葉・中正  
眞理子・美奇・芳子  
千鶴子・保佳・廣太郎

### 舞ひ上りたき雪片は窓に来る 長岡 石田遊水

雪国の生活の中で寒さのためにより水分をなくし軽くなった雪が細かく観察されている。吹雪が横殴りで吹き付けてくると障害物によってその風向きを左右か上下に急変する。御句の通り窓まで吹き付けた吹雪は今逃げる場を上求めて雪片は上昇するのである。そのような現象を熟知して「舞ひ上りたき雪片」と雪の気持に置き換えて捉え「窓に来る」と表現して吹雪の臨場感をもたらししている点見事である。（静龍）

作者の地名から、雪国の大変厳しい生活環境なのだろう。筆者は雪国で生活をした事がないので、どうしても雪を詠む時には美しい姿と捉えるが、雪国で生活をする人にとっては事情が違うだろうえしかしこの句は敢えて美しく詠んだ事により、自然の偉大

さを余すところなく伝えている。（廣太郎）

### 木の実植う次の世にその次の世に 神戸 山田弘子

木の実を植え、それが収穫出来る様になる迄には、気の遠くなる年月を要する。林業をなりわいとする者の諺に「木を植える馬鹿、何もしない馬鹿、伐る馬鹿」がある。馬鹿と評されるこの三者は親・子、孫の三代である。この場合の馬鹿とは、蔑んだ言葉ではなく、尊敬の言葉なのである。植えてみたものの、自分の代はおろか、次の世代になつても、まだまだといった生業だからである。二代目にしたところで、何もしないのではなく、育林に励む日々の連続である。孫の代に漸く、収穫の喜びを味わうのだ。森は空気を浄化し、水資源を涵養し、美しい風景を提供し、健康な森には多くの野生鳥獣が生息することが出来る。

だから、みどりの日が国民の祝日となつているのである。次の世にその次の世に、我が意を得たり！ の名吟である。

（とほ歩）

地球が誕生して数十億年だろうか。又その間に生命の誕生があり、その進化という説もあるが、そんな営みを経て現在があるのだ。そしてそれから未来へと向かう営みがある。地球、又宇宙の歴史からみれば生物の寿命は微々たるものではあるが、そんな中にも喜びに溢れた句である。（廣太郎）

天地有情

花子選

春めきて来し一堂の内外かな  
 春めくやこれより堂の外工事  
 飾られし踏絵の叫びありにけり  
 父の星薄氷育てをりにけり  
 春暁の空清ければ香を聞く  
 春昼に充滿したる命かな  
 富士覚めてゆく春光に染まりつ  
 空明けてすつくと春の富士のあり  
 みよし野のうすくれなぬの霞かな  
 昇りつつ月は朧を脱ぎゆけり  
 散りやうも五色椿でありにけり  
 この冷に花の足ぶみあらまほし  
 三極と言へる公約数の咲く  
 加速度のつきたる緑菖蒲の芽  
 春分の日の明るさを存分に  
 惜しまれて逝く人ばかり立子の忌  
 花の気を朝の山気を胸深く  
 春にしてこのみ吉野の深き空

上越 堀前小木菟  
 同 東京 稲畑廣太郎  
 同 豊中 瀧 青佳  
 同 東京 今井千鶴子  
 同 神戸 長山あや  
 同 山田 弘子  
 同 同 山田 弘子  
 同 同 後藤 立夫  
 同 同 東京 今井 肖子  
 同 同 山田 閨子  
 同 同 同

吉野山奥へ進みし花を追ふ  
 面映ゆき朝の一事も花の宿  
 くれなぬに溺れ牡丹の金の蕊  
 くれなぬのゆたにたゆたふ牡丹かな  
 高速道急ぐにあらず山ざくら  
 下萌の狭庭に花の鉢あまた  
 巡り見る城址しきりと花散れる  
 花散つて城址静かさ又元に  
 初花と呼ばれて白き夜を迎ふ  
 雨やさし花種蒔きし夜の耳に  
 畦道は札所裏道冬遍路  
 榕樹林とも寒椿林とも  
 正調の今朝の鶯誇らしげ  
 椿子の後の消息知る椿  
 船に酔ひ出して観潮どころでは  
 ため息をつくことばかり鳥雲に  
 大いなる山の春日にかうべ垂れ  
 句碑に来てゐる存問の春の雲

長岡 安原 葉  
 同 同 樫原 稲岡 長  
 同 同 たつの 浅井青陽子  
 同 同 福岡 松尾緑富  
 同 同 八尾 岩垣子鹿  
 同 同 徳島 上崎暮潮  
 同 同 吹田 宮崎 正  
 同 同 神戸 三村純也  
 同 同 熊本 岩岡中正  
 同 同 同

# 天地有情句評

## 汀子

昇りつつ月は臙を脱ぎゆけり 神戸 長山あや  
春の月が昇って行く姿を見事に捉え表現して妙。

この冷に花の足ぶみあらまほし 神戸 山田弘子

桜の開花時期はその年によつて遅速がある。花見の計画があり  
待つて欲しいと願う作者。

三極と言へる公約数の咲く 神戸 後藤立夫

三の公約数で枝が分かれ花が咲く三極に寄せる作者の興味。

惜しまれて逝く人ばかり立子の忌 東京 今井肖子

ひとが惜しまれて亡くなるのを実感する立子忌。

春にしてこのみ吉野の深き空 東京 山田閨子

春であるのになんと深く澄み渡った吉野山の空なのだろうと感

動する作者。

吉野山奥へ進みし花を追ふ 長岡 安原 葉

咲き進んで行く吉野山の桜を中千本、上千本と追って行き堪能  
する。

春めきて来し一堂の内外かな 上越 堀前小木菟  
堂の内も外もようやく春らしくなって来てほつとされたのに、  
虚子忌に虚子のもとに旅立たれてしまった。

父の星薄氷育てをりにけり 東京 稲畑廣太郎

夜空を仰ぐと星が美しい。あれは亡くなった父の星、きつと朝

は冷えて薄氷が張るだろう。

春暁の空清ければ香を聞く 豊中 瀧 青佳

春の早朝の空は清々しい。香を聞く心持に誘われる朝のひとつ

き。

富士覚めてゆく春光に染まりつゝ 東京 今井千鶴子

明けてゆく朝の富士山を見ていると春光に染まって美しい。